The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	風をデザインする
Author(s)	平井, 直子
Citation	a+a 美学研究. 2019, 13, p. 150-153
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90102
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

風をデザインする

平井直子
Naoko Hirai

デザインということばの定義の難しさはしばしば指摘されるところだが、その難しさというのは、デザインというのが絵画や写真などの具体的事物ではなく、概念だからというところに起因しているのではないか。一体デザインとは何かと説明しようとすると、ポスターです、プロダクトです、家具です、建築です、といったように、具体的な物を示して言わないと理解してもらえないという事態を幾度も経験してきたが、しかしながら、デザインを研究していますと言って、その次に具体的な対象物を説明しなくてはならなくなった途端に、なんだかつまらなくなるし、なにかが違うと思ってしまう。もちろん具体的な物であるのは確かなのだが、それを研究対象にしようと思った動機の源となった「デザイン」というものの魅力が、半減してしまったような感じがするのだ。

その理由を突き詰めて考えてみると、デザインというのは、物なのだが、物ではないというところにあるように思う。例えば、「デザイン家具」という言葉があったり、「デザイン家電」「デザイナーズ・マンション」という言葉があったりするように、同じ家具や家電、マンションなどでもデザインに属するものと、デザインに属さないものがあるらしい。ではその線引きはどこでするのか。すなわち、家具でも家電でもマンションでも全てデザインの枠でくくれるものだが、同時に、同じ家具や家電、マンションという言葉で呼ばれていても、この範疇に属さない物もあるということである。

これに対して答えは出さないままに、少し建築体験について考えてみたい。建築体験とは何かと考えるに、一つにはその柱や窓枠、壁面に施された意匠を観ることであり、もう一つにはそれを体感したことによってしか得られない、中に入った時の空気感、光の入り具合、空間性などその場所にいる心地よさに繋がる全体としての総合的な感触のようなものを味わうことであろう。意匠については「美しさ」に繋がるが、空気感や空間性などの感触は、「美しい」というよりは「良い」という形容詞の方が合っているように思われる。

この「良さ」を目に見える形にするのも言葉にするのも難しいが、現代建築を代表する建築家のひとり、レンツォ・ピアノ（Renzo Piano, 一九三七―）が、彫刻家の新宮晋（しんぐう・すすむ、一九三七―）とコラボレーションを行っていることは、この問題を検討するにあたって好例であるように思われる。ピアノが《関西国際空港》（一九八八―一九九四）［図1］を手がけた際、風をデザインしたのにそれに気づいてもらえないのは残念だとして、新宮に依頼したのが《はてしない空》である。ピアノの特徴的な曲線的なヴォールト屋根に、新宮による青と黄の二色が織りなす

図1 ｜ レンツォ・ピアノ《関西国際空港》（1988–1994）
国際線出発フロアの新宮晋《はてしない空》（1994）筆者撮影（2018）

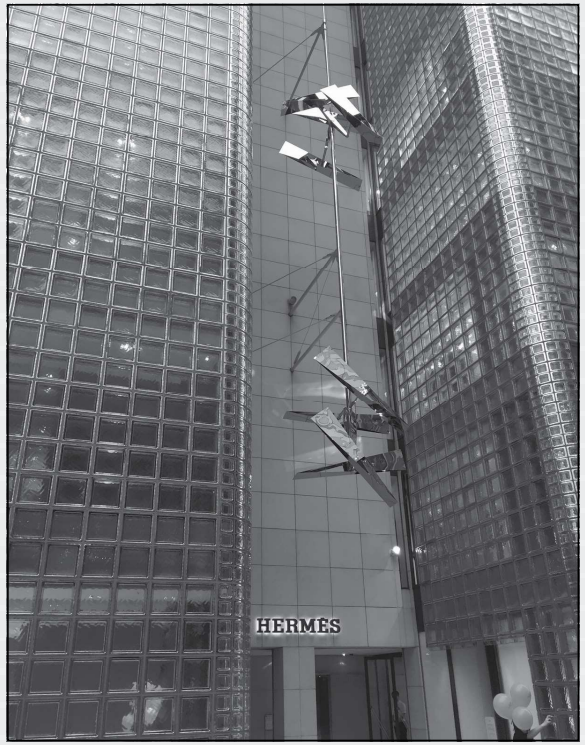

図2 | レンツォ・ピアノ《メゾン・エルメス》(1998–2001)と新宮晋《宇宙に捧ぐ》(2001)、筆者撮影(2018)

「グラム彫刻」が釣り下がり、少しずつ動いている。「グラム彫刻」とは作家自身の命名で、一グラム単位にまでこだわって設計することによって外からの小さな振動にも反応する動きを生み出す彫刻であることを意図している。ピアノ建築の良さは、意匠というよりは空間性にあるが、その空間性は、広々とした空間を生み出す技術とともに、そこに光が入り風が通ることで生み出されている。意匠に優れた建築と空間性に優れた建築の二つのタイプがあるとすれば、ピアノは後者に属するように思う。この新宮とのコラボレーションは、銀座の《メゾン・エルメス》(一九九八—二〇〇一)[図2]でも行われており、二つの塔に挟まれたエントランス上部の壁に、ここでは野外にその作品が設置されて、風に反応してかすかに動いている。

この意匠と空間性の二つの特性は、建築批評を行う際のスキームとして役に立つ。ルネサンス時代のブルネレスキ(Filippo Brunelleschi, 1377–1446)はどちらかと言えば空間性、アルベルティ(Leon Battista Alberti, 1404–72)は意匠に長けると言った風に。盛期ルネサンス時代にフィレンツェ他各地に建築物の設計を手がけたブルネレスキは、意匠はアルベルティに比べて地味だが、中に入ったときの空間性の拡がりは、実際のスケールを超える感覚があり、ピアノの建築と近いところがある。

最初に保留にしておいた疑問に立ち返ってみる。デザインとデザインでないものの線引きは、その物自体が造形的に優れているか否かはもちろん重要な要件だが、もう一つには、その物を取り巻く外側や余白に対する意識があるかないか、という点が大きいのではないか。例えば、ポスターならばイラストや文字のないところへの意識がどれだけあるか、ということであり、フォントならば、墨を載せない余白の部分にどれだけ意識が向いているかということである。そして、家電や家具ならば、置いたときに部屋にどのような影響を与えるか、壁面とのバランスはどのようであるか、すなわち、その物の置かれた空間への意識がどれだけ向いているかなのではないだろうか。

目に見えない物をデザインすることは、建築についてのみ行われる作業ではなく、物そのものの意匠と等しく、デザインにとって重要な要件であるように思われる。デザインという言葉が概念であり物ではないということとは別の次元で、デザインは非物質性に結びついている。

平井直子(ひらい・なおこ)
大阪中之島美術館準備室主任学芸員。大阪大学大学院博士後期課程単位取得退学。博士(文学)。専門は、デザイン史、西洋美術史、博物館学。